

今日の聖書箇所はイエスが世を去る前に弟子たちに語った最後の説教といわれています。この説教の中でイエスは自分をぶどうの木に、キリスト者をその枝に譬えました。1～17 節では、「愛」という言葉がキーワードとなり、イエスと弟子たちとの関係が語られていました。ところが、今日の箇所 18 節以下では、「憎しみ」という言葉がキーワードになっています。ここで、「世から憎まれる」とは、20 節後半に記されていますように迫害されることです。この福音書が書かれた 90 年代、それまでユダヤ教の一分派のように考えられていたキリスト者たちの共同体は、イエスを神と等しい者、神の子と告白することから、ヤハウェを唯一の神とするユダヤ教の会堂から追い出される状況にありました。著者は彼らの共同体が置かれている状況をイエスの生涯の物語の中に反映させつつ福音書を書いているのです。この時、「イエスもそうだった。世がわたしを憎んでいた」ことを思い起こしたのです。それは大きな励ましと慰めであったことと思われま。ところで、私たちは、今日のイエスの言葉を、自己正当化するように聞いてはならないと思うのです。私たちが誰かに非難されたり、批判されたりする時に、自分たちが間違っているにもかかわらず、それをイエスの弟子として正当化することがしばしばあるのではないのでしょうか。「自分が正しく、相手が間違っている。」そういう構図で考え始める時、私たちはかえって神さまの御心から離れていくことがあると思うのです。現在起きている世界中の戦争の多くは宗教戦争の様相を呈しています。それはお互いが宗教的に異なる立場にいることを認めず、自分の信じる宗教のみが正しいとする姿勢にあるのではないのでしょうか。本当に自分たちは神さまの御心に従っているだろうか、徹底的に吟味しなければならないと思うのです。私は、ここでのイエスの言葉を自分に当てはめてみる時に、やはり自分の中にまだ、イエスに属する部分と世に属する部分とが共存していることを思います。私はそのことを自覚しつつ、世に従っていかうとする自分をイエスが共に歩まれていることで克服するように求められているのだと思うのです。その時、イエスに繋がっていることを覚えるのです。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」(5節)。私たちが必死になってぶどうの木にしがみつくといいことではなく、まことのぶどうの木に私たちがすでに連なっているのだという事実を、神さまからの贈り物として聞き取りたいと思うのです。